

報告1：山口早苗（東京大学総合文化研究科博士課程）

「中華副刊」に見る占領下の文学活動

本報告は、国民党汪精衛派の機関紙であった『中華日報』の文藝欄「中華副刊」の考察を通して、戦時期の上海文壇のうち和平派と目された文化人の文学活動の一端を明らかにするものである。これにより、これまで研究対象が抗戦派や大衆文学作家に集中していた戦時上海文壇の実態により近づくことができよう。

『中華日報』は1932年4月に上海で創刊され、日中戦争での一時休刊を経て、1939年7月に復刊後は汪精衛政権の機関紙として1945年8月まで発行された。当初『中華日報』には華風・経済週報等いくつか副刊が設けられたが、1942年6月22日からは「中華副刊」に一本化され、1945年8月21日まで全692期が掲載された。これまで先行研究では、戦時期淪陷区の代表的な文藝欄として「中華副刊」の存在は指摘されてきたが、その内容が総合的に検討されることはなかった。これには主に二つの要因が考えられる。一つは、本報の所蔵機関に限られ、入手が困難であったこと。もう一つは、汪政権の機関紙という評価が先行し、特に中国大陸では本報そのもの及び本報に関する研究が回避されてきたためである。

しかし、上官蓉等当時の文化人の発言からは、「中華副刊」が純文学作品を掲載する定期刊行物として、高い評価を受けていたことが窺える。また報告者による内容分析から、「中華副刊」には、当時上海文壇で活躍していた柳雨生・路易士・周越然等が積極的に寄稿したこと、魯迅特輯や華北文藝座談会等複数の特輯が組まれたことなど、活発な言論空間が形成されていたことが明らかになってきた。このように「中華副刊」は、当該時期の文藝雑誌として著名な『古今』『天地』等と同様に、重要な地位を占めていたことが窺えるのである。1944年には、「中華副刊」の内容を抜粋した『文壇史料』が刊行され、短期間に増刷を繰り返し替えていることも、これを裏付けていよう。

本報告では約3年に亘る「中華副刊」の動向を紹介した上で、個々の特輯記事・座談会等の内容を検討し、本文藝欄の性格・傾向を分析する。